

フェイスマスクを通じて みる湾岸地域の女性たち

後藤真実 ことう まなみ / エクセター大学アラブ・イスラーム研究所博士課程

その実態が、一般には広く知られていないペルシャ湾岸地域の女性たち。天然資源や政治的な側面が取り上げられがちなのこの地域において、女性たちはなぜ、そしてどんな想いで伝統的なフェイスマスクを日常的に着用し続けているのだろうか？



湾岸地域に注目して

ペルシャ湾岸地域というと、従来湾岸アラブ諸国とイランに分けられ、個別に研究が行われてきた。しかしながら、ペルシャ湾岸沿い地域は歴史的に人々が行き交い、婚姻や移住などを通じて、国境を超えた「共通の文化」を形成してきた背景がある。私はクウェートとカタールでアラビア語を学んだ後、カタール大学の修士課程で研究を進める中で、湾岸地域の女性についての文献や情報が乏しいこと、そして国外では彼女たちに対するイメージが実際の人物像とはかけ離れていることに疑問を抱いた。

ところで、ムスリム女性が顔を覆う「モノ」としては、一般的に黒いヴェールが取り上げられがちだが、湾岸地域の女性はヴェールとは異なる、ブルカ（「全身を覆う布」ではない）またはバトゥーラと呼ばれるフェイスマスクを着用してきた。しかしながら、この湾岸地域周辺に限られた、フェイスマスク着用の民俗文化については、湾岸アラブ諸国とイランの両側を含めた広範囲の研究はなされておらず、私はこのフェイスマスクと女性のアイデンティティの関係に着目して研究をしたいと思うようになった。そしてそれが、テヘラン大学でペルシャ語を学び、2015年から3年間、断続的にアラブ首長国連邦、イラン、オマーン、カタールで行った現地調査のきっかけになったのだ。

現地の女性たちへの聞き取り

現在、フェイスマスクを日常的に着用している女性たちのほとんどが45歳以上であり、その数は年々少なくなっている。聞き取り対象であるこれらの女性たちは基本的にはアラビア語もしくはペルシャ語の湾岸方言しか話さず、さらには親族以外の人々とはあまり話したがない傾向にある。研究者として言語を習得することはもちろんのこと、私が女性であることや比較的若い世代であることは、湾岸地域のコミュニティーに溶け込むことに優位に働いた。また近年、宗教的、政治的対立が高まる湾岸アラブ諸国とイランにおいて、アラブ人でもイラン人でもない第三者の日本人であるからこそ、現地で多くの人々に聞き取りができたと感じている。

一方で、事前に知り合いを通じて聞き取り対象の女性と面会の約束を取り付けることが難しい地方の村などでは、直接その村を訪問し、知らない家のドアを叩いて面接調査をお願いしたことも少なくなかった。それでも快く家の中に招いてくれたのも、この地域の人々に共通するもてなしの文化があるからこそだろう。

フェイスマスクの起源と種類

現地の言い伝え（必ずしも史実に忠実ではない）によると、16世紀初めにポルトガルが南部イランを占領した際、地元の若い女性たちに嫌がらせをしていたポルトガル兵から



金色のフェイスマスク。髭の形に見えるだろうか？これを被って海外旅行に行った女性の中には、マスクが純金でできていると思われて、盗まれた人もいます。



未婚のバルーチ人少女。初潮を迎えてから結婚するまでは、黒や茶色のマスクを着用する。



バルーチ人の既婚女性。マスク上の細かい刺繍それぞれに名前が付いており、魚模様など、土地柄が象徴されているものもある。



内陸部オマーンの女性。昔はインディゴ着色の生地が主流だったが、利便性などの理由から、マスクの形はそのままポリエステル生地が使われるようになった。

彼女たちを守るために、髭を模ったフェイスマスクを用いたのが始まりだと言われている。これは、遠方にいる兵士たちに、フェイスマスクを被った女性たちを髭の生えた男性と見間違えさせることによって、彼女たちから遠ざける作戦であったという。その後、同種のマスクは人々の移動や物流によって対岸のアラビア半島、さらには東アフリカに伝わり、個々の地域に順応しながら独自の発展を遂げていった。

ペルシャ湾岸地域のフェイスマスクの特徴としては、厚めの生地で作られていること、そしてマスクの形を保ち、呼吸しやすくするために鼻の部分が突起していることが挙げられる。現在でも使用されているフェイスマスクは、地域ごとに大きく3つに分けられる。つまり、1) ペルシャ湾岸両側で主に着用されている、インディゴ着色のコットン生地の表面を金色で加工してあるマスク、2) 南部イランの主にバルーチ人たちが着用している、様々な色の綿糸で作られているマスク、3) オマーンの内陸部または南部で主に着用されている、黒いポリエステル生地で作られているマスクである。

また、マスクの大きさ、形、色、模様、装飾が、着用者の出身地、年齢、子供の数、民族的背景、宗派、経済的・社会的地位を示す重要な役割を担っているため、基本的には個々人の顔の大きさや要望に合わせて、フェイスマスクは着用者本人や

職人の手によって手作りされる。

なぜフェイスマスクを着用するのか

マスクを着用する理由は人それぞれである。この地域の女性たちは宗派は違えど、皆イスラム教徒であるが、実際にフェイスマスク着用理由に宗教を挙げる人は少ない。多くの女性は、初潮を迎える12歳前後、もしくは婚姻後にマスクを着用するという、地域に根付く伝統に従ったのが着用理由だと言う。これは同時に、着用者が少女から女性（妊娠可能期）に、未婚者から既婚者になったということをコミュニティ内に知らせる役割を担ってきたことを意味する。例えば、南部イランのミナブという町周辺のバルーチ人の住む村々では、この慣習は未だ残っており、初潮を迎えた少女たちは黒や茶色の暗い色のフェイスマスクを、そして婚姻後は赤やオレンジといった鮮やかな色のフェイスマスクを着用する。また、花嫁は結婚式当日から数日、純金の装飾をマスクの両側に施した特別なものを着用したりする。

イスラム教徒のヴェールやフェイスマスクは「顔を覆うモノ」として、身元（または正体）を隠すという、女性蔑視・軽視のネガティブな側面が強調されがちだが、現地の気候に適応した実用的且つ女性の美を象徴するモノとしての役割も持ち合わせている。湾岸地域のような、夏には気温が50度を超す日差しの強い場



地図に載っていない、このような集落の女性たちにも聞き取りをする（オマーン）。

所では、単純に肌を守るだけではなく、「白い肌」を保つ機能も有している。例えば、金色のフェイスマスクは着用すると、顔の表面に藍色のシミを残す。このフェイスマスクから染み出る染料は昔から美白効果があるとされ、結婚式前の新婦は、マスクの生地を水で湿らせ、出てきたインディゴ染料を顔全体に塗って美肌にしようとするなど、実用面から重宝されてきた。また、マスクの大きさは、年齢が増すにつれて大きくなるのが一般的であるが、その理由として、加齢によるシミやシワ、抜けた歯の部分を隠し、目に視線を集めることで、外見的美を保つ役割が挙げられる。しかしながら、ここ数年は年配の女性であっても、ほとんど顔を隠さないタイプのフェイスマスクを意図的に選択し、着用していることが増えている。これらの女性は、自分の肌や歯が健康で綺麗であることを周囲に見せるためだけな

く、「若くいたい」という彼女たちなりの自己表現の一環だと話す。

また、伝統的にフェイスマスクを着用してきた世代の女性の中には、マスクが身体の一部であると感じている人たちもいる。基本的に、フェイスマスクを着用し始めた女性たちは一生涯にわたり日常的にマスクを被って生活する。祈りと睡眠の時、そして夫や息子、女性の前ではマスクを外してよいとされているが、実際には子供や孫たちの前で一度も素顔を見せたことのない女性もいる。そのような女性たちに話を聞くと、「恥ずかしいから」「ブルカなしでは裸になったよう」と、はにかみながら答えてくれることがほとんどだ。そして彼女たちの親族にとっては、「ブルカを被った顔」が彼女たちの「本当の顔」なのだ。

フェイスマスクとの関わり合いの変化

近年、近代化やグローバル化に伴い、若い世代の女性たちが日常的にフェイスマスクを着用することは少なくなっている。一方で、フェイスマスクを自分のアイデンティティの一部とみなし、結婚式や特別なイベントの際にクリスタルなどでアレンジしたフェイスマスクを被ることで伝統を残そうとする動きもみられる。また観光客へのお土産用に、フェイスマスクをモチーフにした小物も手作りされ、これらは南部イランの女性たちの重要な収入源になっている。このようにフェイスマスクはカタチや用途を変えながらも、ペルシャ湾岸地域の女性たちと密接に関わり続けているのである。



イラン・ゲシュム島ではマスクの形が各村で異なる。金の装飾がされたマスクは、着用者の父親もしくは結婚相手が経済的に豊かであり、縁談に恵まれたことも意味する。



マスク職人の手。金色のマスクを触ると藍色のシミが残る。水で洗ってもなかなか落ちない。



イラン・ミナブの木曜市。様々な色のマスクを売っている。

*写真はすべて筆者撮影。